

# 東大・岡さん 聖母マリア図「新説」を提起

# 出津のキリシタンに伝わる？

キリシタン史を研究する東京大史料編纂(へんさん)所助教の岡美穂子さんが6日、長崎市内であった第54回長崎・キリシタン文化研究会で講演した。昨年、フランスからカトリック長崎大司教区に返還された「聖母マリア図」について、「当初(長崎・)浦上村伝来とされたが、外海・出津のかくれキリシタンが隠し持っていたものである」と「新説」を提起した。

## 長崎で講演



「聖母マリア図」をめぐる謎について語る岡さん  
=長崎市立山1丁目、長崎歴史文化博物館



「聖母マリア図」(カトリック長崎大司教区蔵)

「聖母マリア図」は16世紀末から17世紀初め、禁教下の長崎で制作された水彩画。聖母マリアとカトリックの聖人5人が和紙に描かれている。2

009年、パリのカプチン・フランシスコ会修道院に収蔵されているのを日本のキリスト教史研究者が見つけた。由緒書と呼ばれる資料によると、長崎にいたパリ外国宣教会のポワリエ神父が同画を入手。1869年、バチカン公会議のため帰欧した同会のプティジャン神父を通じて、フランスのポワリエ神父のおじに渡ったとされている。

岡さんは講演で、史料に基づき実証した経緯を紹介。まず、同僚に宛てたプティジャン神父の書簡に触れ、出津の信徒から同図を見せられたプティジャン神父が「大浦天主

## 布教に絵画活用の可能性

堂にある全聖画と引き換えにでも」入手したいと考えていたが、かなわなかったと指摘。「プティジャン神父が手に入れたなら、69年の公会議に持参して披露するのではないか。日本と関係ない(ポワリエ神父の)親戚に贈ったというのも、ふに落ちない」と語った。

さらに、フランス人司教マルナスの書籍「日本キリスト教復活史」(1985年)を引用し、弾圧が厳しくなった1870年に、出津の信徒2人がポワリエ神父に信心用具を託したという記述を紹介。仮説とした上で、「ポワリエ神父が聖母マリア図を入手したのはこの時ではないか」と論じた。

また、フランシスコ会の象徴である三つのひもの結び目が同図に描かれていることから、「同会が出津で積極的に布教したと考えられる」と分析。「地理的に宣教師が訪れることが少なかった出津では、絵画のような視覚に訴える道具が布教に活用された可能性が示される」とまとめた。

(田代菜津美)